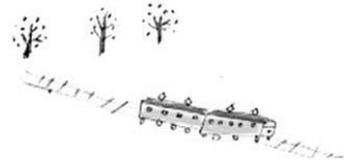


『新しい学校』一九五三年十一月(興文館)

■教育時評

指導要領改訂の

一本槍ではこまる



審議会の答申をめぐって、やかましい論議が行われた社会科問題も、文部省の予定通り、指導要領の改訂という所まで筋書が進んだようである。社会科問題協議会はその後全国大会をひらいて第二段の策を考えているらしいが目下考慮中であるらしい。

そして今度は、歴史学者の方から、三笠宮まで加えられて、逆コース的な歴史は御免こうむるといふきつい申入れがあつて、関心は指導要領の改訂に移つたかの如くである。

放送討論会や対談会などで保柳視察官の発言をきいていると、文部省も社会科を育てようとして一生懸命なのだそうである。そうすると、これは好意の衝突であつて、社会科にとつては誠にありがたいことで、これなら

心配しないでもよかつたようである。

さて指導要領の改訂の委員会では、聞く所によると、どういふ地名を教えるかとか、どういふ人物を教えるかとかが問題になつてゐるといふことだが、果してそんなことで社会科が育つのだろうか。

一体指導要領を改訂し、教科書の検定基準をいじることが、社会科問題のおちだといふことは、文部行政に時代的錯覚があるのではないだろうか。社会科は教師が不馴れなのでむづかしいといふことは文部省も大いに認めていることらしいが、それなら、そういう教師を育てて社会科が教えられるようにする指導行政がもつとあつていい筈ではないか。教授要目と、国定教科書で教師を職人かデクノボウのように扱つて来たのが過去の旧式行政であつたのに、いまだにそれがかわつていないような気がする。社会科は教師の積極的自主的な意欲と創造的な活動とによつて教授するものであつて、それはデクノボウのなし得る所ではないのである。所が指導要領と教科書で相もかわらず右向け右と、やらかそうとしているのではないか。

慣れない教員に、研究の方法を指導し、その組織的活動を援助し、教育の条件となる資料や教材教具を提供して教師を育ててこそ、

社会科も育つのである。一体これからの教育は教師の組織的な研究活動と適切な施設設備、教材教具の地盤がなければ成立たないことは誰も認めていることなのである。だから、それほど社会科を育てる気持があるなら、指導要領の改訂などといふ文書いじくりを後生大事にかかえていないで、もつとのり出したらいいと思うのである。

大体、今迄の行政が翻訳コースオヴスタデイの生みっぱなしで、大したことはなかつたのである。それが今こういう問題を生じた最も大きな原因ではないか。この辺の教育行政全体のあり方をもう一度われわれは反省してみたらい。文部省ばかりでない。県教育委員会、指導主事などといふいかめしい存在も、文部省のテープレコーダー程度の役割も果していかなかったではないか。指導行政などといふものはどこにもありはしないのである。

こういう事態で、また指導要領改訂があつても、実は大したことはないのではないか。そんなことが大切だと思ふのは、指令一本で世の中がかわると思ふ旧式官僚イデオロギ―ではないか。本当に保柳視察官の言うように社会科を育てる気があるなら、これでは聞こえませんと言いたくなるのである。

こう申しては失礼に当るかも知れないが、極く少数を除いては、現場の先生はめんどくさい指導要領をよむのはきらいなのである。それは言葉の遊戯にすぎないという一面を直感的にもっているからなのでもある。こういうセンスは大切にしないではいけない。もっと具体的なことで、こうするのだということがわかるような指導を望んでいるのだ。それは行政学でいえば、現場の条件整理をはかるということである。所が今の教育行政は、依然として文書による指令行政ではないか。このセンスが指導要領の改訂一本槍ということになって出て来るのである。

こう考えると、大切なのはむしろこれからで、例えば社会科を育てる五カ年計画が、或は十カ年でもよいが、そういうものが必要なのである。そうしてあらゆる場面に於て、このことが取り上げられるようにならなければいけないのである。日本社会の民主化の重大な武器である社会科を育てるのにそれ位の構えがあつていい筈である。例えば教員の現職教育として認定講習が行われているが、そこへも一役買ってもらったらい、学校図書館にも教材整備について一役買ってもらったらい、視聴覚教育運動にも一役買ってもらったらい、そういう風にするべきであ

るし、また進んで一役買うようになるべきでもある。所がセクシヨナリズムというか。てんでんばらばら、そして現場ではただ散漫にあれもこれもという羅列主義となつて、まとも何もないのである。社会科を育てる道はかくして中々むつかしいのである。

〈矢口 新〉